

# 会社も個人もダブルでお得! 役員退職金を使った節税

退職金は、何十年もの労働の対価に対するご褒美ということで、極めて有利な税制が適用されており、個人（所得税）と会社（法人税）の両方を節税できるという大きなメリットがあります。

税法上は「退職所得」といい、退職所得の金額は次のように計算します。

## 退職所得の金額＝

$$(\text{収入金額(源泉徴収される前の金額)} - \text{退職所得控除額}) \times 1/2$$

また、退職金に対する特別控除である「退職所得控除額」は次の表のように計算します。

勤続年数	退職所得控除額
20年以下	40万円×勤続年数 (80万円未満の場合は、80万円)
20年超	800万円+70万円×(勤続年数-20年)

例えば勤続年数40年の場合は2,200万円(800万円+70万円×(40年-20年))が退職所得控除額となり、退職金がこの金額以下であれば所得税はかかりません。そして、退職金の額が退職所得控除額を超えたとしても、その超過額の2分の1が課税対象となります。(※但し、役員等としての勤続年数が5年以下の者が退職金の支給を受ける場合には2分の1とする措置は適用されませんのでご注意ください。)よって、例えば勤続20年で退職金5,000万円だった場合、退職金5,000万円から退職所得控除額800万円を控除した残額の2分の1である2,100万円が退職所得の金額となります。さらに、退職所得は給与や不動産など他の所得とは合算されない分

離課税方式となっています。このように退職金は独自の計算方法による有利な税制となっています。

法人のオーナー経営者の場合は、役員退職金を支払うことで、社長個人は所得税の節税になり、法人は退職金が損金算入されて法人税を節税することができます。よって退職金の額が大きいほど節税効果は高くなりますが、役員退職金はいくらでも無制限に損金算入が認められているわけではありません。不相当に高額な部分は法人の損金として認められず、税務調査ではよく揉めるポイントです。役員退職金の額が過大であるかどうかは、過去の採決事例や判例によれば、同業類似法人の役員退職金と比較して判断されていますが、この同業類似法人のデータは税務署内部にだけ存在して一般には公開されていません。そこで、役員退職金の適正額算定の目安として、「功績倍率方式」という計算方法が一般的に利用されています。

功績倍率は、社長、副社長、専務、常務など役員によって異なります。一般的に2.0~3.0倍程度と言われていますが明確な規定はありません。この算式に照らして、例えば最終月額報酬額100万円、勤続年数20年の社長は、功績倍率が3.0倍とすれば6,000万円の退職金が適正額となり、この範囲内であれば税務上否認されないと考えてよいということになります。

$$\text{役員退職金} = \text{最終月額報酬額} \times \text{勤続年数} \times \text{功績倍率}$$

役員退職金は多額になりやすく、税金に与えるインパクトも大きく多大なメリットがある反面、税務調査でよく揉めるネタの一つですから、きちんと仕組みを理解して上手に活用することが大切です。

文●セブンセンス税理士法人 パートナー 徐 瑛義

SSG Topics

## セブンセンス公式note更新中! 若手社員からみたセブンセンスグループを 発信しています☆

こんな記事があります!

- ・CM動画も掲載!?「オフィス紹介」シリーズ
  - ・新卒社員が徹底取材!「社員インタビュー」シリーズ
  - ・就活のお役立ち情報!「採用担当から就活のお話」シリーズ
  - ・楽しいイベント盛り沢山!「健康推進活動」シリーズ
- [セブンセンス note]で検索! ぜひご覧ください(^\_^)



最新記事はこちらから



ただ30秒! 英語で「Topics」をYouTubeにて配信中!

Seventh Sense Group Channel

YouTubeサイト内[Seventh Sense Group]で検索・登録!

<https://www.youtube.com/channel/UCi20YyTxj7HhPALT0Lc101Q/>

ネイティブスピーカーのスタッフが、日本の税制やビジネス、そのほかさまざまなトピックスを、30秒間でコンパクトに英語で発信。情報収集や英語のヒアリングなどに、ぜひ活用ください!



大手私鉄なのに中古車両を導入？ 西武鉄道「サステナ車両」

9月26日、東京～埼玉で鉄道事業を展開する西武鉄道から、「環境負荷の少ない車両を、小田急鉄道と東急鉄道から100両を授受する」という発表がありました。地方の鉄道会社に、都市部の大手私鉄から車両が譲渡されるのはよくありますが、大手間では珍しく話題になっています。

西武鉄道は譲渡される車両を「サステナ車両」と呼称。その定義は「他社から譲受したVVVFインバータ制御車両」。受領した車両は、2024年度以降、池袋線や新宿線以外の支線にて運用予定です。池袋線や新宿線には、これまで通り随時新造車両が投入されます。

しかし受領する車両は、古いものでは1982年に導入されたものもあります。なぜ、西武鉄道はこのような動きをしているのでしょうか。

その理由は、保有車両のVVVF車両の占める割合です。VVVFは簡単にいえば「直流電流を交流電流に変換する」機能のこと。減速時に発電できる回生ブレーキが使えるなど、直流車両よりエネルギー効率が良いのです。2023年現在、小田急や東急は100%VVVF車両ですが、西武は71%に留まります。

新造車両には時間も予算もかかるため、固定費を抑えつつ省電力車両を保有する他社から融通してもらい、VVVF車保有率を高める選択をしたようです。西武によれば、直流電流車に比べると電力使用量は50%削減、年間5,700トンのCO2削減効果があるとのこと。

コロナ禍や人口減もあり、鉄道会社の経営も右肩上がりとは行きませんが、リユース品を使

い地球環境に配慮しつつ、サービスの維持を図る。古い車両でも、ちょっと乗ってみたいくなりますね。



37 数独

A～Dに入る数字を足すといくつになるでしょうか？  
解答は、次月号に掲載します。

	1		8		3
D		4		6	
6			3		2
	4			7	A
		9	B	5	
3		6			7
	3		C	9	
		2		6	
7		2		4	

解答欄  +  +  +  = 合計

9月号の答え  +  +  +  = 合計

先達に学ぶ。

「どんな状況でも  
挑戦し続ける」

堀江 謙一氏  
(ヨットマン・海洋冒険家)



2023年6月4日、堀江謙一氏が単独無寄港太平洋横断を達成した。世界最高齢の83歳での達成は、ギネス世界記録にも認定。日本へ戻った翌日の日記には「頑張って良かった」と綴っている。

1938年に大阪府に生まれた堀江。長年にわたる海上での挑戦は、関西大学第一高等学校のヨット部に入部したことから始まった。1962年には、23歳にして世界初の単独無寄港での横断航海を達成。しかし当時は日本からパスポートを持たずに出国していたことから「人命を軽視した暴挙」といった批判があがった。また、10年後の1972年には世界一周に挑戦。しかしこれが失敗に終わると、メディアからはさらに叩かれることになった。「世界一周をどうやって証明するのか」といった質問をされたこともあり、成功を願われていなかったのかと堀江は思うこともあったという。

それでも堀江は、海への挑戦をやめなかった。世界一周失敗の翌年には、小型ヨットで西回り単独無寄港での世界一周に成功。1982年には4年の年月をかけて、縦回りでの世界一周も達成した。サンフランシスコ市長からは「名誉市民の鍵」を受け取り、イタリアのサンレモ市では「海の勇者賞」を受賞するなど、堀江は世界で高い評価を得ている。日本では批判も多かった堀江だが、兵庫県豊岡市より植村直己冒険賞の特別賞を受賞。2011年には内閣総理大臣賞を受賞した。自分が目指すものは、時に周りから否定されることもある。それでも自身の欲求に正直に挑戦を続けたからこそ、見られる景色もあるはずだ。逆風でも意志を貫く堀江の挑戦は、まだ続いていく。

Book Review  
今月の一冊

変革の勇氣

観光・サービス業が生まれ変わる方法

- 編著：佐々木 司
- 出版社：金融ブックス
- 価格：1,650円(税込)

小さな旅館・ホテルでもこれまでのやり方にとらわれず、何らかの付加価値を提供すれば、お客様に喜んでいただき、良いビジネスができる。観光・レジャー事業を営み、人気施設へと育て上げた著者が、その思考とノウハウを語る。コロナ禍に疲弊した観光・サービス業へ。今、変革無しに生き残れない!

kinyubooks.co.jp



今月、この日に何があった？



1988年10月3日

テレビアニメ「それいけ!アンパンマン」が放送開始

今年放送開始35周年を迎える、幼児向け人気アニメ。やなせたかしによる原作絵本「あんぱんまん」シリーズをアニメ化したものだが、制作側とやなせの意見がなかなか折り合わず、放送は予定より2年も遅れた。折しも昭和天皇の体調悪化による蔓延した自粛ムードの中という、不安の中での放送スタートとなった。しかし程なく人気番組となり、今では毎年の映画や豊富な玩具、映像、音楽、テーマパーク事業など、展開は多岐に渡る。ちなみに30周年記念の人気投票、1位はアンパンマンだが、2位はいきまん・3位コキンちゃん・4位ドキンちゃんといった敵側。良いライバルがいるから物語は盛り上がる、といったことか。